

雑司ヶ谷研究 8

御会式大祭への子供の参加と近隣住民とのコミュニケーション

Zoshigaya Study 8

– Children's Participation in the Oeshiki Festival and Communication with Adults in the community –

住居学科	細野 茜	三浦 茜	葉袋 奈美子
Dept. of Housing and Architecture	Akane Hosono	Akane Miura	Namiko Minai

抄 録 本稿では、雑司ヶ谷界隈における児童の御会式大祭への参加の実態について確かめた。お花作りの準備、万灯の組み立て、纏の練習といった機会を通して、準備段階から子供たちが地域の大人と交流する機会がある。また当日は、地域の公立小学校へ通う児童の約半数が、何らかの形で御会式大祭に参加していることがわかった。御会式大祭では、見物、沢山の練習の必要のない太鼓、そして練習の必要な纏を振るうことという異なるステージでの参加の場が用意されている。子供の好みに合わせた多様な参加が可能であることが参加率の高さの背景になる。また学年が上がるにつれ、友達を通じた地域コミュニティの一員としての輪を広げていることも確かめられた。練り供養の実施単位である講社のリーダーは、子供たちが異年齢と交流する良い機会であると感じ、次世代育成を意識しているという回答も得られた。

キーワード：住環境、コミュニティ、住民交流、新住民

Abstract This paper examined children's participation in the Oeshiki Festival in the Zoshiga area. Making paper flowers, building a large lantern, and practicing the use of firemen's standards for festivals can provide the chance for children to communicate with adults. On the festival day, children can be involved in the festival in different ways as they wish. They can just watch, they can participate in playing drums, and they can try fireman's standards after practicing. This may make participation easier. Children often join a festival group with their friends. This may help children to form new human relationship in the area apart from their family.

Keywords: living environment, community, residents' communication, newcomer

1. はじめに

地域で行われる行事は、近隣住民同士の交流が深まったり、共用空間の手入れが行われるなど、コミュニティ形成にも重要な役割を果たす。本稿では、雑司ヶ谷地域において地域に根付いた行事の一つである御会式大祭を通して子供たちがどのように地域コミュニティの一員となる機会を得ているのかを探る。子どもは本来多くの人とのコミュニケーションを通して豊かな感情を育み、多様な価値観を持ち、他者を尊重することができるようになる。また様々な人にあいさつをする等で声をかけられ、地域の中

での役割を果たすことで自己肯定感を高めながら成長をしていくが、近年の子供たちのコミュニティ環境は、このようなコミュニケーションを行うために、必ずしも良い状況にあるとは言えない。空き地や車の来ない路地が減り屋外遊びがしにくい、大人が自宅近辺の屋外で仕事などの作業をする時間が減っている、不審者対策として見知らぬ人との会話が憚られるような雰囲気、スポーツ少年団・塾などに費やす時間の増大、電子ゲームの普及による屋内遊びの充実など、その要因は多種多様である。

雑司ヶ谷界隈では、上記の子供のコミュニケーションを行う環境のうち、多くの他の住宅地が失っ

た要素の幾つかを未だに持つ。狹隘道路に位置付けられる路地が多く残り、個人商店や工務店、工房等があり地域の中で住み働く人がいる等、子供たちが多くの人とコミュニケーションを維持するための要素が確認される。本稿では、こうした雑司ヶ谷の住環境だけでは補いきれないコミュニケーションの機会を、ほかにどのような場で確保されているのかを確かめるために御会式大祭を通じたコミュニケーションの状況を確認する。

多くの住民が参加をする行事として大鳥神社の祭礼と、法明寺の御会式大祭が挙げられる。特に参加者が多いのは、毎年10月16日から18日に開催される御会式大祭であり、地区内にある20を超える講社（参拝を行うグループ）があり、住民同士の繋がりの場となっている。筆者らは既に雑司ヶ谷研究2で、各講社への奉納する人と講社の拠点との関係について確かめた^{参考1}。本稿では、講社の活動を通じた子供と地域の大人のつながりを確認する。

本研究は、2015年夏に実施した雑司ヶ谷の講社の講元（一部別の方による対応）へのヒアリング、及び南池袋小学校の児童へのアンケート調査（2015年11月）に基づいた分析を行う^{注1}。

2. 御会式大祭と地域コミュニティ

2.1 地域の行事と御会式大祭

雑司ヶ谷の御会式大祭^{注2}は、多くの住民が参加する行事の一つである。御会式大祭は、日蓮上人の法会であり、鬼子母神堂を守り雑司ヶ谷地域の中心的な存在である法明寺が、御会式連合会と連携をしながら取り仕切る。図1のように桜の花を模した万灯を持った講社と呼ばれる毎に、団扇太鼓を鳴らして練り歩く。雑司ヶ谷には講社が20以上あり、寺や警察なども含めた関係機関と連絡をとりながら調

整役を果たす御会式連合会を結成して運営にあっている。毎年10月16日には講員の住む町内の練り歩き、17日には鬼子母神像が出土した清土鬼子母神から不忍通り・目白通りを練り歩き鬼子母神の表参道から鬼子母神、そして法明寺に参詣する。18日には他の地域からの遠征講社も加わり池袋駅前から明治通り・目白通り・鬼子母神表参道を通り鬼子母神堂、法明寺へ練り供養を行う。総勢5000人ほどの行列が、夜7時から12時ごろまで掛けて練り歩く。多くの講社が皆で作成した花のついた万灯を一基ずつ持つほか、それを移動させながら、練り歩く。同時に纏を持つ人もいて、勇壮に振ることを楽しみにする人もいる。多くの人は、団扇太鼓をと呼ばれる鳴り物を用いて、リズムを取りながら練り歩く。特に18日には多くの見物客があり、屋台等が並ぶため、練り供養に参加するわけではなくとも、万灯行列を見物したり、屋台でいつもとは違う楽しみ方をする等、お祭りの雰囲気を楽しむ人も多い。

2.2 講社の設立経緯と受け入れ

日蓮宗のお会式講社は、信徒により構成されることが多い。しかし、雑司ヶ谷鬼子母神での御会式大祭には、信徒ではない人も数多く参加する。鬼子母神を守る法明寺近江正典住職は、日本人の多くが正月には神社に初詣に行くのと同様に、雑司ヶ谷住民は御会式大祭に参加をすると考えていると言う。特別に檀家や信者といった関係者でなくても参加することを歓迎している。

講社の設立経緯を現在の講元（講社の代表者）に尋ねたところ、不明なことも多いが、隣組により設立したもの、35年前に若者たちで遠征用（他の地域でのお会式に参列すること）の講として発足したもの、御会式大祭を盛り上げるためのもの他、町



車線規制をして行われる明治通りでの練り供養



御会式前になると練習のために置かれる玄関先の纏



万灯が設置され講社の集いの場となる御仮屋

図1 御会式大祭の様子とその準備

会の有志、大鳥神社の祭礼で神輿を担いでいたメンバー、お店のお客さんや同級生等といった仲間によるものもある。また、御会式の際の子どもの居場所（子どもの行動を把握する意味も含めて）を作って欲しいと依頼に基づくもの、地元で講社がなかったため同好会として始めたもの、御会式を通して地域が一丸となれるように、人が増えた頃に若い人で立ち上げたもの、同好会の鼓会（太鼓の会）が前身にあるもの等、町会に関係なく、有志の集まりなど、地域の住民同士のつながりを深めるような方法での設立が語られた。御会式大祭は、太鼓をたたく、夜の練り歩きといった子供たちにも非日常性の高い魅力的な要素のある行事であり、参加意欲が数多くの組織を作り上げることになったと言えよう。表1からもわかるように、比較的新しいものが多く、特に新しいものに同好会的要素が強く見られる。

講社の講員としての人数規模は、様々であるが、200人規模の参加者がある講社は、比較的新しい講

社に見られ、町会といった組織よりも同好会やお神輿の会の延長のように、居住地域が特定されない設立経緯によるものが該当する。

2.3 子供への対応

講元に、子供の参加やかかわりについて、どのように意識しているのかを確かめたところ表2のような結果となった。声をかけ、御会式大祭を通して知り合った子供と、町の中で出会えば挨拶をすることのできる関係を築いている。講元の中には、自営業を雑司ヶ谷界隈で営む人も多く、平日の日中でも雑司ヶ谷にすることが多いことも、このような交流が実現している背景にある。ヒアリングでも、スポーツ少年団、ボーイスカウト、など様々な活動が地域にはあるものの、参加する年齢層が限定されていて、異世代との交流の機会は少ないという点が指摘されていた。一方で御会式大祭は、様々な世代が集まり顔を見知る機会であり、貴重な世代間交流の

表1 御会式講社の設立経緯と規模

設立年	講社	設立経緯							練り供養人数規模			
		町会	町会+商店街	講社の復活	若者による新講社設立	地元でも御会式を	同好会	神輿の会の御会式部門	~50人	~100人	~150人	~200人
それ以前	K	/	/	/	/	/	/	/		●		
	I	/	/	/	/	/	/	/				
1940~50年代	C				●				●			
1960~70年代	F				●				●			
	R			●					●			
	P	●							/	/	/	/
	H			●							●	
	O						●				●	
	L							●	●			
1980~90年代	J							●				●
	G					●						●
	E	●								●		
	N							●	●			
	D		●							●		
2000年代	Q					●					●	
	A				●				●			
	M					●			●			
	B						●					●

*斜線…不明、または把握していない

表2 話者の子どもとの関わり

地域で子供を育てる	・子どもは大事にする。子どものころから親たちには大事にしてもらった、親からも子どもは大事にするように教えられている	挨拶	・会うと挨拶
	・地域で子どもの面倒を見てあげたい。育てていく。		・自分からするようにしている
仕事など	・今は(引っ越してしまったため)ないが昔は町内を回っていたからみんな顔が分かった	御会式	・子どもからも大人からも挨拶する
	・顔見知りになると声掛けしている「元気か?」「早く帰らないと危ないよ」		・初めにこっちからしてあげることで、次からは子どもから挨拶しやすくなる
仕事など	・みんなが〇〇の子、と分かって声掛けしあうのは安心	その他	・纏の練習に来る子などは、子どもの方が覚えていて挨拶してくれる
	・野球通して挨拶教える。知らんぷりしたら怒る		・御会式に参加している子で顔なじみになる子もいる、そういう子は挨拶もする
仕事など	・仕事柄地域内で会うことが多い(配達)	その他	・毎年来る子は顔もわかる
	・孫の友達と会う機会も多く、親同士の挨拶もある		・並木通りを歩いていて挨拶しない子どもはいない

場だと指摘する講元もいた。このような子供への対応を、代替できる行事は少なく、貴重な世代間交流の機会である。

2.4 御会式大祭が果たす地域の交流

住民は、一年かけて準備を行うというが、特に直前になると、太鼓の練習、纏を振るう練習、そして集会所などに集まって花を折る、その花を開いて万灯に取り付けられた竹に飾るなどの作業を行う。万灯の拠点となるお借屋の設営も力を合わせた仕事の一つである。こういった準備作業は、各講社ごとに大人の会員が集まり実施するが、太鼓の練習や纏の練習は、年齢を超えて子供たちが縦のつながりを持つ機会となっている講社が多い。

表3は、御会式大祭が地域交流に果たしている役割についてのコメントを整理したものである。地域の人の気持ちが一気にさせてもらえる、新住民の受け皿となっている等、平常時には、勤務先・勤務時間・生活時間などが異なる住民同士交流の場となることを意識して御会式大祭を行っていることが確かめられた。

また、表4では、御会式大祭の準備段階の取り組みでヒアリングで確かめられた子供たちとの交流の機会を示す。大きくは纏の練習とお花づくりであるが、御会式大祭が実施される直前に、身近な場で行

われていることがわかる。個人宅のこともあるが、公共的な集会所や比較的広い空間を持つ商業施設の一部などを利用して、行われている。またこれらの準備段階において子供を含めた住民同士の交流として挙げられた主たるものを整理したのが表5である。子供たちの名前を覚えるようにしている大人がいること、屋外での万灯組み立て作業をしている大人に自然に子供たちが声をかけ、将来の担い手としての観察をしていることなどが伺われる。御会式大祭の当日も勿論重要であるが、こういった事前の準備作業において、子供たちが大人と気軽にコミュニケーションをとり、地域になじむ機会を持つことができていると確かめられた。

またこの地域は池袋から徒歩圏であり、2008年には地下鉄副都心線に雑司が谷駅が開業し、護国寺駅にも目白駅にも徒歩圏という通勤には便利な立地である。古くから住む住民もいるが、住宅が更新され多くの新しい住宅や集合住宅ができ、いわゆる新住民が多く住む地域である。新たな居住者には子供のいる世帯もあり、御会式大祭は、新住民であっても子供たちのネットワークを通して、参加しやすい伝統行事である。表3でも示されるように、講元の中には、誰でも希望する人を受け入れる姿勢を持つところも多く、地域住民と交流することのできる機会となっている。

表3 御会式の役割に関する意識

<p>地域をひとつにする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・もし御会式が無かったら三丁目はバラバラだろう。 ・気持ちがひとつになる ・普段バラバラな人がこの行事でまとまる、地域の人結びつきが強くなる ・花づくりなど、日常的にまとまる ・今回の文化財指定もみんなが雑司ヶ谷の人としてまとまるいい機会になったのでは（2014年12月に雑司ヶ谷は日本ユネスコ協会連盟の「未来遺産」に選出された） ・昔の方も子どもも女性も、みんながひとつになる ・居場所的役割 ・地域が一丸となる場にしたい。 ・地域が密着する
<p>他町会との交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・御会式がなかったら違う地区の人は知らなかった。 ・連合会参加して、知り合いが増えた。揉め事なく仲良くやりたい。 ・御会式で100人くらいは町会を超えた知り合いができた。各講で3~4人は知っている。 ・普段関わっていない方、商売をやっている方とつながる。
<p>新住民の受け皿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参加したい人には門戸を開いておけるようにしたい→講社が互いに情報を共有し合う ・御会式が地域の人にとって、誰でも参加できるような形にしていきたい、誰かがどこか叩きたいと思ったら自由に叩けるようになればいい、各講社それぞれ入るためのルールがあるけど ・新しくこの地域に入ってくる人が地域に興味を持つきっかけ
<p>多世代交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい赤ちゃんからお年寄りまでが一緒のできるお祭り ・年齢に関わらず親しくなれる ・消防団やボーイスカウトは世代が一緒だが、御会式は子どもからお年寄りまで広い世代の交流の場になっている。 ・リズムが単調だから若い人も年の人もやりやすい ・コミュニケーションをとるきっかけ ・御神輿の場合、ある程度年齢や肩の高さなど揃っている必要があるが、御会式は子どもからおじいちゃんまで誰でも参加できる、外国の人でも宗教関係なく参加できる、人を選ばない、今はカーニバル的
	<p>子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃地域の大人と接する場所は御会式だった。〇〇さんも御会式が無かったら年が違うし知り合いになっていない ・子どもは、上下関係が見えるし社会勉強になる ・(自分が子どもの頃の体験として)上下関係を学んだ場だった ・子どもたちと地域をつなげる場所。 ・地域で子どもを育てる場
<p>同窓会的役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同窓会になるのもいい所。お嫁に行った女の子たちも帰ってきて、雑司ヶ谷から出た子も見に来てくれたりやったり、自分みたいにならんとやっていると声もかけてくれる ・1年に一回会う場、楽しむ場 ・御会式があるから、その時に会う人も多い ・同窓会。日にち決まっているので合わせやすい ・ここにくれば誰かに会える ・御会式時期は同窓会みたいなもの。この日だけは来る人も多い ・一年に一回の同窓会（他地域へ引越した人も、この日に合わせて雑司ヶ谷に来る人がいる）
<p>意識 地元</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・無形文化財になったからといって、全然知らない外部のものがむやみに入らないように守る ・地元のものであって欲しい、地元の人が楽しめる場 ・この地域は御会式が中心。
<p>地域共通の楽しみ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・御会式のために1年が回っている。 ・おじいさんおばあさんはめんどくさいといいながら毎年楽しみにしている ・自分たちが楽しむ。お寺と一緒に盛り上げる ・生きがい楽しみ ・ファンが多い。
<p>伝統</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年中行事・欠かすことのできないお祭り ・伝統文化をつなげる場所

表4 準備作業の場所と交流

	東部睦	高田若睦	千登世	燈友会	目白台睦	目白睦鬼神会	高田南睦	三嶽	目白商工	東池母神会	波羅門	表参道	雑二講	
纏の練習	日程	9月から週1回			御会式一週間前			花作りの日	10日前から	10月に入ったら		9月中旬	御会式2~3週間前	
	場所	南池袋小ステップ前			講元自宅前、鬼子母神境内	駐車場	みみずく公園	講社事務所前	地域内公園			地域商店前	雑司ヶ谷公園前	鯉義前道路
	参加者	小中学生			子ども	子ども	若い人	子ども	小・中学生	子どもたち	子ども	大人	子ども20人*2	子ども10人弱*2
お花づくり	日程	御会式2週間前	10月1週目	御会式1週間前			御会式1週間前	御会式1週間前	御会式1週間前	御会式1週間前	10月1週目	御会式1週間前	1週間前	
	場所	千登世創造館	会員宅	山口精米店			講元自宅	講社事務所	雑司ヶ谷幼稚園	法明寺集会所	豊島区まちづくり広場		モズカフェ	加藤工務店
	参加者	女性陣	女性陣	男女比2:1			女性・子ども中心		女性陣・子ども	男女比1:2			女性陣・子ども	女性陣・女子大有志

表5 お花づくり（女性中心）・万灯組み立て（男性中心）をしながら行う交流

共通次項	お花作り	万灯組み立て
<ul style="list-style-type: none"> ■ 年配の方が若い人に作業を振りコミュニケーション" ■ 大人は子どもの名前をみんな知っている。 ■ 高校生や20代の子は昔から参加 ■ 作業後は全員で宴会 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 年に1度みんなが集まる日。お嫁に行って雑司ヶ谷を離れた人がこの日に合わせ戻ってくる。 ■ 子ども同士が同級生のママ友集団。学校の情報交換していた ■ 近況報告や地元の人の話。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 男性陣の万灯作りに興味津々の子ども。手解きを受けるなど交流。 ■ 子どもが来て大人が「サッカーしてきたの」など声かける。 ■ 午前は小学生が多かったが午後になると部活が終わった中学生も合流、ワイワイ作業していた。

3. 南池袋小学校児童の御会式大祭へのかかわり方

3.1 調査の背景と概要

法明寺の境内に隣接し、鬼子母神堂・法明寺や御会式大祭の講社の多くの拠点のある場所が指定されている小学校（南池袋小学校）では、学校の学びの中に地域の行事などを理解するための学習が行われている。地元大鳥神社の祭礼の学習を神社及び氏子の方と連携して行う、雑司ヶ谷鬼子母神堂の参詣土産として知られるすすきみみずくの製作を保存会か

らの指導で行う等、この地域独自の文化を地域の住民の方から教えてもらうという方法で、学年の学習ステージにあわせて取り組んでいる。

御会式大祭については、その概要が紹介されると同時に、纏を振るう練習をしたい児童が休み時間に使えるように子供用の纏を用意するような支援も行っている。多くの児童が御会式大祭を見に行く、参加するなどの形で既にかかわりを持っているため、大鳥神社の祭礼のような参加という特別な学習の機会は持たないとのことである*2)。

そこで小学校のご協力を得て、アンケート調査を

3年生以上に配布をし、2015年度の御会式大祭への参加状況について分析を行った。アンケートの配布は、御会式大祭の実施された後の11月に学校を通して配布・回収し、生徒277名分の回答を得ることができた。回答者の概要は表6に示す通りである。

表6 アンケート調査対象者の概要

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
女	53	37	25	33	147
男	30	32	33	31	126
回答なし		2		1	3
総計	83	71	58	65	277

3.2 参加状況

まず図2で居住地の概要のわかる登校班別に参加状況を確認すると、いずれでも約半数以上の児童が参加しており、一部の地域で大半の児童が参加しているケースも見られるが、概ね居住地の偏り無く参加していることがわかる。ことに、池袋駅に近い集合住宅Aに住む子供、つまり新住民割合の高いと推定される居住者集団の中においても半数が参加していることが興味深い。

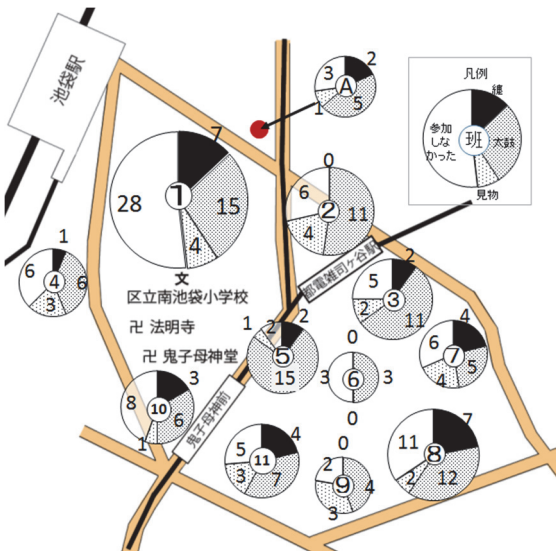


図2 登校班別御会式大祭参加状況

図3のように参加の日程を見ると、3日間とも参加した人が一番多く、一日だけ参加をする児童については、18日が一番多い。また、三日間とも全て参加する児童で纏を振るう児童の割合が高い。行列を見ることは誰でもできること、太鼓をたたくことは講社の会員であるか知人がいる必要があること、また纏は講元などから振るうことを許可された人しか参加できず、周辺の人に怪我をさせないように練習を積んでからしかやるができないという条件があることを考えると、御会式大祭に対する関心の度合いが、この結果に繋がったとも言える。また三日間とも参加する熱心な児童が173名の参加者中75名と43%を占め、二日以上参加する児童は、115名(66%)という人数である。そのうち行列を見るだけなのは、22名(15%)に過ぎず、団扇太鼓をたたくことに参加するのは90名(62%)、そして纏を振るうのは34名(23%)と御会式大祭に参加した児童の5人に一人は、地域の大人の人から纏を振る力があると信頼されている。また同時にそれは、単に顔を知っているという以上のコミュニケーションの機会があることを意味し、御会式大祭が地域の年齢層を越えた人のつながりを形成していることが確かめられた。

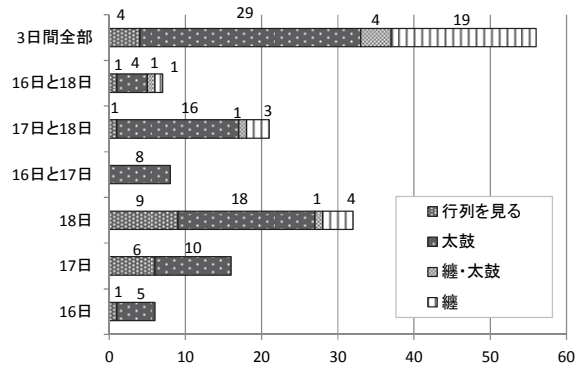


図3 当日の参加状況

3.3 参加の背景

次に参加のきっかけなどについて確かめる。図4は、学年別、紹介者別に確かめたものである。低学年ほど家族の繋がりでの参加しており、高学年になるほど友達などの繋がりでの参加割合が増える。自らの力で地域コミュニティに入ろうとする一歩となっていると言えよう。

今回が初めてではない児童に、参加する講社について図5のように確かめた。毎年同じ講社に参加するという児童が多いものの、6年生では年によって異なると年によって違うという回答が増え、友達に誘われて様々な講社に係わる児童もいるということが数値でも確かめられる。更に図6で、纏を振るう児童と、太鼓のみの参加の児童とで比較をすると、纏を振るう児童は比較的毎年同じ講社に参加をしていることも確かめられる。纏を振るう児童の35名のうち28名は纏の練習に参加したと言っており、技術の必要なものに取り組みたいという意欲が、固定的な集団の中に留まる傾向があることもわかった。表7に示した纏の練習への参加と毎年同じ講社に参加するののかという関係性の結果からもわかる。こういった継続的な参加は、住民同士の繋がりを深いものに導くことができよう。

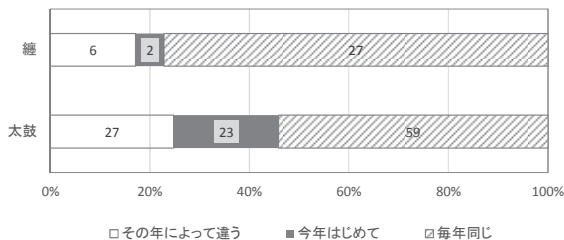


図6 参加内容と参加講社の関係

表7 まといの練習への参加と参加講社

	した	していない
その年によって違う	4	2
今年のはじめて	2	0
毎年同じ	23	5
合計	29	7

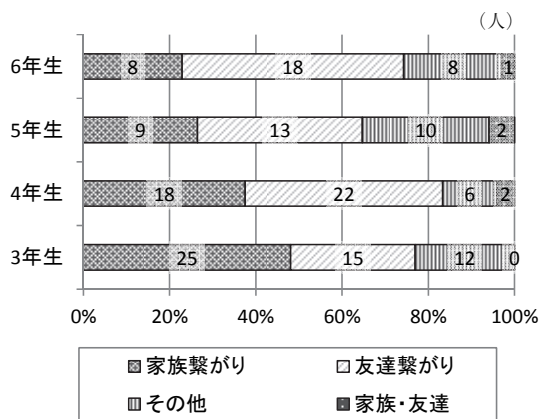


図4 参加のきっかけ

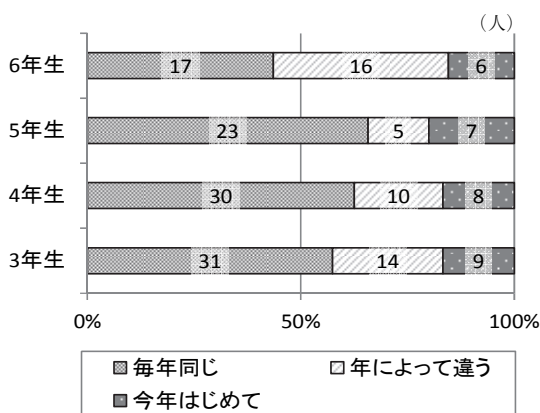


図5 参加する講社

3. まとめ

本稿では、雑司ヶ谷界隈における児童の御会式大祭への参加の実態について確かめた。御会式大祭は年に一度の行事ではあるものの、多くの住民や子供が係わり実現されるものである。その準備過程などを通して、大人が子供たちと交流をし、普段すれ違いの多い異なる年齢層同士でのコミュニケーションの機会となっていることが確かめられた。また地域にある小学校の児童の多くが御会式大祭に何らかの形でかかわることが確かめられた。そのかかわり方は、練り供養を見物するという気軽な参加の形態もあるが、約半数の児童が、太鼓をたたたくような“見られる側”となり練り供養の構成員として係わることがわかった。これは、顔を見る程度かもしれないにしても、同じ講社の行列に参加をする大人と何らかの交流の時間を持つことを意味する。更に、纏を振るうというのは、長い棒の状態である纏を振り回すことでもあり危険が伴うため、どの講社でも振るうことのできる人を限定している。一種子供の憧れの役割であるが、そのため振りたいのであれば、努力をして大人から認められる必要がある。このようなハードルがあることで、子供たちの中には、より深い交流を講社の中心的な役割を果たす人と交流をする機会を持つことになる。

御会式大祭は、3日間という複数日にわたる行事であることから年に一度のお祭りであっても日程的

に参加しやすいこと、気軽な参加から練習の必要な参加まで、参加方法に多様性があること、更に少し前から準備をする必要があり子供たちも準備に参加したり眺めたりすることで大人の活動の様子を知ることができること等から、多様なかわりが可能となることが確かめられた。そしてこの御会式大祭を中心に運営するメンバーは、子供たちとの交流を大切に、地域で子供たちを育成しようという場にもなっていることが確かめられた。多くの新住民が移り住む大都市の中の住宅地である雑司ヶ谷であるが、御会式大祭は多世代交流の貴重な機会となっている。

補注

- 1) 2015年の御会式は、10月16日(金)～10月18日(日)までの開催で、18日については、途中近隣で火災が発生したために、一部の講社で練り供養が最後まで行われなかった。しかし練り供養は開始されており一部の練り歩きは実施することができ、参加する意思のある児童はいずれかの練り供養に参加したと判断をする。
- 2) 法明寺では、日蓮上人の忌日である10月13日に宗祖御会式を行っている。これとは別に地域

の行事として鬼子母神御会式を10月16日から18日に行い、こちらは御会式大祭として区別して扱っている。

- 3) 南池袋小学校中村校長へのヒアリングより。

参考文献

- 1) 奥井 麻子・葉袋 奈美子, 雑司ヶ谷研究その2—御会式開催支援における人の繋がり—, 日本女子大学紀要 家政学部 第59号, 2012年
- 2) 大正大学『1998年度比較宗教論Ⅱ<祭りの意味と役割>報告書 祭りのダイナミズム—雑司が谷鬼子母神万灯練供養の研究—』
- 3) 豊島区教育委員会『雑司が谷鬼子母神御会式調査報告書』(2014年) p2～12, p20～115
- 4) わいわいぞうしがや 『雑司ヶ谷の御会式知恵袋』(2014年) p4
- 5) 白浜 晋平, 山崎 寿一, 竹田 和樹, 金 斗煥, 川口 麻子, 久保 佳与子『祭りにおけるコミュニティの可視化—能登半島地震被災集落・道下における2009年夏祭り調査報告(4)—』(2010年)
- 6) 前村 聡司, 樽谷 幸頼, 横山 俊祐, 徳尾野 徹, 『岸和田だんじり祭りと地域生活に関する研究—岸和田市大北町を対象として—』(2013年)